

はじめに

「レント」とは、「イースター」から40日を遡った「灰の水曜日」から始まる期間のことです。この期間、6回の日曜日がありますので、日曜日を含めると、「レント」の期間は、実際には、46日間になります。

この「黙想の手引」には、「イースター」の分も加え、47篇の黙想が収められています。47日の間、マルコの福音書全体を通読し、黙想するように編集されていますので、この「黙想の手引」は、マルコの福音書通読の手引としても使っていたいただけます。

毎日指定された箇所を読み、そこに描かれている主イエスの姿を想い、その声を聴きとってください。聖書を聞くことなく、この手引だけを読むようなことはしないでください。また、先を急ぐことなく、その日、その日

の箇所を十分に黙想し、自分のものにするようにしましょう。

執筆者は次のとおりで、執筆者のイニシャルが各ページの末尾に記されています。

細見 剛正 (TH) スタージ長老教会
協力 牧師

国沢 則隆 (NK) インターナショナル・
クリスチャン教会牧師

高岡 宏光 (HT) オーランド日本語
バプテスタ教会牧師

中島 由美子 (YN) ウェストロサンゼルス・
ホーリネス教会牧師夫人

中尾 フィリップ (PN) ダラス永楽長老教会日本語
ミニストリー協力牧師

中尾 照代 (TN) 同夫人

なお、聖句は新改訳2017より引用しています。引用の後の括弧内の数字はその箇所の節を表します。

バプテスマのヨハネが荒野に現れ、罪の赦しに導く悔い改めのバプテスマを宣べ伝えた。（4）

レントは「悔い改め」の時ですが、こんにち、「悔い改め」ほど説かれることの少ない教えはありません。誰もこの言葉を喜ばなくなりました。しかし、それが喜ばれようが喜ばれまいが、「悔い改め」は罪が赦されるためになくてならないことなのです。

主イエスの宣教の第一声は「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」（マルコ1・15）でした。昇天のときも、「その名によつて、罪の赦しを得させる悔い改めが、あらゆる国の人々に宣べ伝えられる」（ルカ24・47）と言われました。使徒ペテロはペンテコステの日「それぞれ罪を赦していただくために、悔い改

めて、イエス・キリストの名によつてバプテスマを受けなさい」（使徒2・38）と説教し、使徒パウロも「ユダヤ人にもギリシア人にも、神に対する悔い改めと、私たちの主イエスに対する信仰を証してきたのです」（使徒20・21）と言っています。ヨハネの黙示録には「悔い改め」という言葉が12回出てきます。じつに神は、「すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる」（第二ペテロ3・9）のです。

聖書に明確に教えられている通り、「悔い改め」を実践し、悔い改める者に与えられる神の恵みを味わいたいと思います。
祈り 主よ、人を悔い改めに導く、あなたの慈愛と寛容を無駄にすることがありませんように。PN

すると彼は立ち上がり、すぐに寝床を担ぎ、皆の前を出て行った。それで皆は驚き、「こんなことは、いまだかつて見たことがない」と言って神をあがめた。（12）

もうこの頃にはイエスがおられると聞くと、人がBBQのハエのようにわんさかと集まってきました。牧師なら誰もがそれを夢みます。四人が中風で寝ている人を戸板で運んで来たのです。でも中に入れないので、屋根に穴を開けて、病人を降ろして来ました。聖書勉強に家を開ける人は、家を潰される覚悟がなければできません。

主は彼らの信仰を見て、「あなたの罪は赦された」と言われました。病人は罪よりも中風を癒やして欲しいと思ったでしょう。律法学者達は「何という神への冒瀆」と怒りました。イエスは彼らの心を読まれて、イエスが地上で全ての権威を持

つことを誰もがわかるためにと、中風の人を瞬時に癒やし、歩いて帰らせました。人々はこんなことは見たことがないと驚くのです。議論が好きなら、一日中実のない議論をしてください。神の力を経験したいなら、イエスを信じてください。あなたは今だかつて見たことのない奇蹟と喜びの世界に入るでしょう。イエスが神の子だからそれが当たり前なのです。

祈り イエス様、あなたを心から信じます。とことん信じ切ります。死ぬほどあなたを好きになります。私を死ぬほど愛してくださいって感謝します。

NK

イエスは起き上がって風を叱りつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われた。すると風はやみ、すっかり凪なきになった。（39）

創世記の最初に記されているように、また、「信仰によって、私たちは、この世界が神のことで造られたことを悟り、その結果、見えるものが、目に見えるものからできたのではないことを悟ります」（ヘブル11・3）とあるように、神はこの世界を、ことばでお命じになることよって創造されました。今日の箇所で、ことばでお命じになるだけで嵐を静めることがおできになったイエスの姿は、イエスがまぎれもなく神が人となられたお方であることを私たちに教えます。

なぜ、天地創造の神が肉体をとり、人となって世に現われる必要があったのでしょうか。それは、その肉体において苦しみを受け、死ぬことに

より、すべての人の罪の罰を身代わりに受けるためでした。「そういうわけで、子たちがみな血と肉を持っているので、イエスもまた同じように、それらのものをお持ちになりました。それは、死の力を持つ者、すなわち、悪魔をご自分の死によつて滅ぼし、死の恐怖によつて一生涯奴隷としてつながれていた人々を解放するためでした。」（ヘブル2・14～15）このように、罪によつて失われていた私たちを取り戻すために、天地創造の神ご自身が代価を支払ってくださったのです。これ以上の驚くべきことは、この世界に、他には存在しません。

祈り 主よ、苦しみと死を味わうために肉体をとり、この世界に来てくださったことを心から感謝します。私たちはそれによつて救われました。HT

しつかりしなさい。わたしだ。恐れることはない。（50）

イエスはパンの奇蹟のあと、群衆の熱狂と喧騒から弟子たちを引き離し、彼らを舟に乗せ、向こう岸に行かせた。そしてご自分は祈るためにそこを去って山のほうに向かわれた。マルコ4・35以下にも同じような記事があつて、あの時、主は弟子たちと同行されたが、この度は弟子たちだけであつた。

ところが夜になつて向かい風に翻弄されることになつた。漁師であつた弟子たちも、このときばかりは漕ぎあぐねていた。イエスは湖を歩いて彼らに近づかれたが、そのままそばを通り過ぎようとした。一体どういふことなのか。モーセやエリヤが神の臨在に出会つたとき、「わたしが通り過ぎるまで、この手であなたをおおつておく」と

記されている（出エジプト33・22、第一列王19・11）。それは、主が神そのものであられるというしるしであつた。また、このとき主は、弟子たちが主を認めて彼らの方から助けを求めのを待つておられたのである。

恐れに取り憑かれた弟子たちは主を「幽霊」だと思ひ叫び声をあげた。しかし、イエスは彼らに話しかけ、「しつかりしなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。そして舟に乗り込まれると、風はやんだ。まことに、主の臨在は救いである。「いさおなきわれを」（新聖歌231）に「疑いの波も、恐れのも、イエス静めたもう。みもとにわれ行く」とあるように、主のもとに近づきたい。

祈り 主よ、こんなに近くにおられるのに、あなたに気づかないでいる私を赦してください。 TH

…その子の父親は叫んで言った。「信じます。不信仰な私をお助けください。」（24）

イエスさまは、人間の不信仰を深く嘆かれました。全能の神の御子が目の前におられるのに、人々はまともに信じることをしなかつたのです。

不信仰と言っても、全く神を信じていないというのではなく、この子の父親のように、一応信じているけれども、全き信仰ではない、祈る時でも「もしかして聞かれるかも…」といった不信仰を含んだ思いで、求めることがあるかもしれないと思いました。人は、難題を抱えて苦しんでいる時には、問題の難しさだけが大きく見えるので、信仰がしぼんでしまうのかもしれない。本当はそういう時にこそ全能の神を信じて、ひたすら祈らなくてはならないのです…。

主は人々の不信仰を嘆き、憤りながらも、主の

もとに来る者を決して退けないで、必ず助けてくださるあわれ深い神です。ですから、たとえ私たちの信仰が足りなくても、とにかく主のもとに行き、主に求めさえすれば救われる！これは大きな恵みです。信仰の弱い者にとつての慰めです。

唾の霊に苦しめられていた子を持つていた父親は「しかし、おできになるなら…」などと言って、イエスさまに叱られました。不信仰な私をお助けください」とお詫びした時、主はその願いを聞いてくださいました。

そうして、「私たちが霊を追い出せなかつたのは、なぜですか」という、弟子たちの質問への答えは、やはり祈ることの大切さ、祈りの力でした。（29）。

祈り 主よ、私たちの信仰を増し、祈りに力をお与えください。

何の権威によつて：(28)

「権威」とは、何でしょう。この世では、あまりに様々な「権威」が氾濫した結果、結局、何が本当の権威かわからなくなっているようです。何を「権威」とするかは、私たちにとつて大切な問題です。

祭司・律法学者・長老たちは、当時の宗教界においてある種の「権威」でした。彼ら自身もそう信じていました。ところが、それは、本当の意味で「天の御国の権威」とはずれたものでした。ここに登場する祭司・律法学者・長老たちの姿は、滑稽にも見えます。彼らはいかにも権威ある者のように振舞いながら、実は、問い返されたイエスの質問に、大いに動揺しているからです。彼らは、自分たちが責められることを恐れ、また群衆を恐れました。ここに、彼らが持っている錯覚している権威が、偽物であることが明らかに現れ

ています。彼らは、神の権威を利用して偽物の権威を振りかざしているだけでした。

この世には何とこの「偽物の権威」が多いことでしょうか。本来、権威とは、天地創造の主、唯一有つて有るお方、神のみが持ち得るものです。私たちに自身が、あるいは信仰共同体である教会が、本当に「神の権威」によつて動いているのか。それとも、神の権威を利用していただけなのか。見分ける必要があります。

「本当の権威」は、恐れません。変わらず、動かないものです。神からの本当の権威をもつていたキリストは、非難や中傷にも屈せず、痛みと悲しみに堪え、ご自分の前に置かれた十字架への道をまっすぐに歩まれました。

祈り 主よ、私に「本当の権威」を見分けさせてください。私とその権威にあつて、臆せずまっすぐに歩むことができますように。

YN

取りなさい。これはわたしのからだです。…これは、多くの人のために流される、わたしの契約の血です。（22）

イエスが弟子たちと共になさった食事は「過越の食事」でした。これは空腹を満たすためのものでも、皆で楽しむためのものでもありませんでした。それは、「食事」の形をとった「礼拝」でした。過越の食事は神ご自身によつて定められたものであり、後には、食事に何を用意し、どのような順で食べるのか等が、賛美や祈りの言葉とともに、こと細かに定められるようになりました。

イエスはこの過越の食事に新しい意味を与えました。過越の子羊がイエスご自身であることを明らかにされたのです（ヨハネ1・29、第一コリント5・7）。過越の夜に子羊が屠られたように、イエスも十字架の上で屠られ、血を流し、全人類

のための贖いを成し遂げようとしておられることを、パンを裂き、ぶどう酒を注ぐことによつて弟子たちに示されました。

イエスは、ご自分の贖いの御業を言葉だけではなく、パンとぶどう酒を与えるという行為によつて弟子たちに伝えました。それは、贖いが言葉の上だけのものではなく、イエスが実際にご自分のからだを献げることによつてなされたからです。弟子たちも主の手から食べ、飲むことによつて、贖いは、たんに知的な承認や感情的な受容によつてではなく、全身全霊によつて受け取るものであることを悟ったのです。弟子たちはそのことによつてイエスのからだに与り、「キリストのからだ」に形造られていったのです。

祈り 主よ。聖餐の奥義を知つて、全身全霊をもつてそれに与る私たちとしてください。

信じてバプテスマを受ける者は、救われます。（16）

マルコの福音書では、復活の記事は、主イエスが弟子たちに「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」（15）との宣教命令を与えたこと、そして、弟子たちがそれに答えて、「出て行って、至る所で福音を宣べ伝えなさい」（20）ことで締めくくられています。

復活と宣教はひとつのものです。主が復活されたことは、心の中にしまいこんでおけるような出来事ではありません。それは、大声で告げ広めずにはおれない事実です。福音の主題は「罪の赦し」（ルカ24・48）ですが、罪の赦しは、主イエスの十字架によってなされ、復活によって確かなものとされたからです。主が復活されなかったら、主の十字架が私たちの罪の赦しのためであつ

たことを証明するものではありません。復活がなければ、私たちは「今もなお、自分の罪の中にいる」（第一コリント15・17）ことになるのです。十字架とともに復活も宣べ伝えられてはじめて、罪の赦しの福音が宣教されたことになるのです。

この福音への応答は「バプテスマ」によってなされます。主は、救いにあずかろうとする者にバプテスマをお命じになりました（マタイ28・19、マルコ16・16、使徒2・38）。復活と福音の宣教、福音の宣教とバプテスマは切っても切り離せないものです。主の復活が全世界に告げ知らされ、人々が主イエスを信じてバプテスマを受け、復活の主とともに新しいのちに生きる者となるよう、心から祈りましょう。

祈り 主よ。私たちをあなたと共に生かしてください。

PN

信じてバプテスマを受ける者は、救われます。（16）

マルコの福音書では、復活の記事は、主イエスが弟子たちに「全世界に出て行き、すべての造られた者に、福音を宣べ伝えなさい」（15）との宣教命令を与えたこと、そして、弟子たちがそれに答えて、「出て行って、至る所で福音を宣べ伝えなさい」（20）ことで締めくくられています。

復活と宣教はひとつのものです。主が復活されたことは、心の中にしまいこんでおけるような出来事ではありません。それは、大声で告げ広めずにはおれない事実です。福音の主題は「罪の赦し」（ルカ24・48）ですが、罪の赦しは、主イエスの十字架によってなされ、復活によって確かなものとされたからです。主が復活されなかったら、主の十字架が私たちの罪の赦しのためであつ

たことを証明するものではありません。復活がなければ、私たちは「今もなお、自分の罪の中にいる」（第一コリント15・17）ことになるのです。十字架とともに復活も宣べ伝えられてはじめて、罪の赦しの福音が宣教されたことになるのです。

この福音への応答は「バプテスマ」によってなされます。主は、救いにあずかろうとする者にバプテスマをお命じになりました（マタイ28・19、マルコ16・16、使徒2・38）。復活と福音の宣教、福音の宣教とバプテスマは切っても切り離せないものです。主の復活が全世界に告げ知らされ、人々が主イエスを信じてバプテスマを受け、復活の主とともに新しいのちに生きる者となるよう、心から祈りましょう。

祈り 主よ。私たちをあなたと共に生かしてください。

PN

試し読みはここまでです。

お気に入りましたら、

注文してください。



Penguin Club

<https://penguinclub.net>